

る。意味は異なっているけれども、ボナヴェントゥラの場合と同様、エックハルトの場合も、創造における出発点は思弁的構想への包括的要求を表明しているということができよう。

このことはもはやトマスとはあまり関係がなく、それだけにエックハルトがここでトマスを挙げていることは興味深いことである。「釈義」(Exegese) と呼ばれるものが、トマスの場合は古典的に取り扱われ、個々の点ではまだマイモニデスによって支えられている。そしてこのことがはっきりしているから、エックハルトは思弁的に歩みを進めることができるのである、と見ることが許されよう。いずれにせよ、その時代の神学が学的基礎を確保したのは、神学が聖書の記述を概念の規準のもとにおき、概念を再度この記述において立証することができたことによるのである。注目すべきことは、ここにどれほど解釈の自由と伝統への対処の仕方の自由が獲得されるかという点である。これこそが思弁的前進を正当化するものである。このことはマイスター・エックハルトだけでなく、すでにボナヴェントゥラにおいてもそうだったのである。(矢内義顕 訳)

意見

テキスト・解釈・比喩

加藤 武

1 テキスト 『創世記』が中世哲学の討論の主題としてえらばれた。4・5世紀は聖書学のルネッサンスをむかえていたと、ラ・ボナルディエール教授がソルボンヌのオート・セテュードの講義のなかでいわれたことを想起する。しかもこの主題の雲は中世全体をおおう。『創世記』はキリスト教だけでなく、イスラム教、ユダヤ教にとって聖典の重要な位置を占める。しかし中世哲学会において聖書がキリスト教の聖典としてあたかもどなたにも自明のこととして扱われるような印象を受ける。これはいかがなものであろうか。この点で森さんが「まずなによりも『聖書』そしてプロティノス等」(提要要旨16頁)として、新プラトン派の書物とか聖書を、おなじレベルにおいて並列していることは興味深い。しかしアウグスティヌスは同時にたしかに聖書の特権性をものべているのである(『告白』8, 6, 14)。そこで森さんに伺いた

い、アウグスティヌスにおいて聖書はいかなる位置を占めるか、『告白』においてなぜいゆる自伝的な物語のあとに創世記冒頭の解釈が付けられたのか、さらに『告白』は自伝なのであろうか。

2 解釈 荻野さんは「教父の聖書解釈は現代の聖書学にたいして何か発言できるであろうか、またそれは哲学神学とどう関わるのだろうか」（提題1要旨13—14頁）、という問題を提起し、広い展望をひらきつつおどろくべく新鮮な報告をおこなった。これは貴重な作業であった。現代の聖書学は記述（descriptio）にかかわるのにたいして、教父の聖書解釈学は価値判断（iudicium）にかかわるといえるかもしれない。では荻野さんにおたづねしたい。現代の聖書学と教父の聖書解釈学とはたがいに深淵をへだてる、所詮は水と油の関係にとどまるのか、いかに両者は接合されるのか。テキストの意図でも、テキストの構造でもなく、記述的機能でなく、詩的機能をてがかりとして、——テキストの背後でなく、テキストの内部でなくテキストの前面としての——、テキスト世界の指示対象としてのレスにむかう解釈が P. リクールなどにうまれつつある。これをどうみるか。

クルクセンさんにうかがいたい。トマス・ボナヴェントゥラ、エックハルトにおいて解釈学はいかなる位置を占めるのか。たとえば、トマスが創世記1章2節bを解釈して、マテリア・インフォルミスの問題にふれ、消極的な解釈をとるアウグスティヌスとは異なって、ディオニシウスを介して、積極的に解釈している（津崎幸子、『トマスの言語哲学』、第6章、1997年、創文社）ことを思うときに、伝統によりつつも、トマスが伝統と批判的に「対抗する」（提題3要旨、17頁）点で、古代教父を深め、しかも美しく更新していることをわれわれは知る。水落さんはわたしの隣りですどい間いをだしておられた。時間の制約も加わり、すれちがひ、こころゆく回答をえられなかったことは惜まれる。クルクセンさんの回答あるいは演説を聞いていて、《ニューバーリーフェルング》と——水落さんのことばをかりると——ヘーゲル的な《ベグリッフ》とが有機的に接合されないで、輝かしいベグリッフという栄光に包まれたまま、尾根からめくるめく深淵にどうと転落する風光がなぜか脳裏をかすめた。永遠のトマスだけがすべてであるぞ、といわれているという印象をぬぐえなかったのであるが、これは西欧の伝統のそとに生を享けた一東洋人のひが目であろうか。しかしそれではすごろくのあがりのようだ。われわれはゲームをやりなおさなくてはならない。オント/テオロジーのすべてをふくめて、もう一度新しい目で《中世哲学》を

根本からみなおさなくてはならないのではないか。

3 比喩の問題 森さんは教父における比喩的解釈と字義的解釈の歴史を懇切にふりかえり、アウグスティヌスがそのいずれにも片寄らず、コンテクストにてらしあわせて解釈する方向にある、といわれた。(提題2要旨, 16頁) もとよりこれに異論はない。しかし子細にみると、アウグスティヌス自身の解釈の姿勢において、けっこうばらつきがあるのではないか。創世記をめぐる四つの注釈において、筆者には森さんが急ぎ足で横目にみて通りすぎた『コントラ・マニケオス』や『告白』末尾の創世記解釈のほうが面白いのだが、さらに行為の問題をあつかう『霊と文字』(412—3年)の《字義的な(=霊的)解釈》もじつに魅力的である。さて森さんへの質問は、それではアウグスティヌスにおいて、シグヌムの世界とその解釈がすべてであるのか、シグヌムの世界を超える直観についてはアウグスティヌスはどのような態度をとるのか、である。これはおそらくこれまで中世哲学会が三年にわたって共同で追跡してきた「哲学と神秘」の問題にもふれる問題でもあるが。

意見

水落 健治

Wolfgang Kluxen 教授の提題は、13世紀スコラ学における創世記解釈をめぐる行なわれた。

教授は、まずトマスの創世記解釈の特徴が、創造物語の「解釈」によりも、むしろ、そこにおいて展開された「神と世界と両者の関係についての概念」に在ることを示し、次いで、この「概念」Begriff が教父以来の創世記解釈の努力の結果生み出されたものであり、それが教会の伝統の中で受け継がれて来ていること、したがって、「世界に始めがある」等の命題は信仰箇条であるから、これを直ちにアリストテレスの自然学等と直結・対峙させるべきではないこと、また、聖書解釈に多義性が許される限り、人は学問的に受容可能な聖書解釈を求めなければならないことを示された。

そして教授は、トマスのこの「概念」の伝統が、ゲントのハインリッヒ、ボナヴェントゥラにおいてどのように受容・展開されたかを明らかにし、この伝統が、エック